



▲「土浦町内祇園祭礼式真図」
(左右に見えるのが「万度」。
個人所蔵)

「墨僊漫筆之稿」表紙

「墨僊漫筆之稿」
(個人所蔵)

町の変化を記録すること

—墨僊漫筆之稿

「墨僊漫筆之稿」と題された古文書があります。墨僊とは、土浦周辺に多くの子弟をもつた城下町の教育者沼尻墨僊(1775〜1856)のことで、傘式地球儀や渾天儀を制作した人物、または書家などとしても知られています。「漫筆」は「気ままにあれこれと書きつづる」という意味です。この史料は墨僊が思いつくままに記した覚書ということになります。書きとめられた土浦の店舗や風俗の一部をご紹介します。

「墨僊漫筆之稿」には、土浦町での商売の始まりや変化についての記事が多く見られます。例えば、町に初めてできた「うどん屋」について。享和年間(1801〜03)の頃に、鱗屋佐右衛門という人が水海道(常総市)からやってきて、田宿町(大手町)で店を借りてうどん屋を開いたのが始まりと書いています。これが大いに繁盛して各所にうどん屋ができました。土浦の「石屋」については、若松屋六蔵が江戸の外神田で碑文を彫ることを学び、さらにこれを伊兵衛という人が習い、名人になったそうです。それまで土浦では葉研彫り(文字の底がV字になる彫り方)で文字を刻んでいましたが、これ以降は文字底が丸い丸彫りが行われるようになりました。ほかにも「経師表具屋」や「建具屋」などの記述があり、城下町が成熟をしていく様子を、町のなかの具体的な変化を通して知ることができます。祭りに関する記事では、「万度」が注目されます。土浦の祇園祭礼を描いた絵巻物などから各町内が華やかな万度を出したことが分かりますが、これらは、江戸の職人が土浦へ来て制作したと墨僊は述べています。先の石屋が土浦から

江戸へ碑文の彫り方を学びにいったのとは逆に、江戸から土浦へと職人がやってきたこととなります。さらに、この職人は祭礼が終わると盆花を制作し、土浦の人がこれを真似して作り始めるようになったとの興味深い記述もしています。この盆花がどのようなものであったのかは分かりませんが、江戸の職人が土浦へ持ち込んだ新しい風習だったと考えられます。江戸時代の土浦を考えるとときには、大都市江戸との人・もの・技術の交流が大切な視点になります。江戸と土浦の文化的交流の一端を「墨僊漫筆之稿」は具体的に示してくれそうです。

墨僊の関心は出来事だけではなく、失われていった習俗や風景にまで及んでおり、貴重な城下町の記録となっています。そのまなざしは広い範囲に向けられており、ふつうの人なら見落としがちな細やかな変化も捉えています。こうした研ぎ澄まされた観察眼をもっていた人物だからこそ、市井の人々の教育にあたることでできたのではないのでしょうか。また、墨僊の視線を通して土浦の歴史や文化を理解できるということは、私たち自身も墨僊から教えを受けていることに他なりません。墨僊が土浦の町の変化を見つめていた視点から、現在の私たちが学ぶことも多いのではないかと感じます。

市立博物館では、来春に「沼尻墨僊」を取りあげた特別展を開催します。これに関連して連続講座「墨僊塾」を開講中です。「墨僊漫筆之稿」は博物館展示室3で12月27日(土)まで展示していますので、ぜひご覧ください。

市立博物館 ☎824・2928

